

まよらさの都市に

しほらしやの文化

次代に誇る「文化都市那覇」を

「文化とは、生活を潤し、美しくすることである。そして、それは美しいものを美しく感じる心の所産である。」那覇市第二次総合計画（1988年）では、市民生活との関わりの中で、文化をこのように定義しています。



全国的に、地方の時代、文化の時代が地域振興のキーワードとしても語られ、定着しつつある感がいたします。

尊い人命、貴重な文化遺産を消失した戦火から、半世紀の歳月を経て、本市は現在の発展を遂げました。

そして、この戦後復興、都市づくりを支えてきたものは、南島文化と総称される先人が育んだ固有の文化への誇りと、分野にとらわれず広く文化を愛する市民精神そのものであったと言えるでしょう。

近年、伝統的な文化を再評価し、また、これを基に新たな文化を創造し発信していく様々な市民文化活動が活発になっております。

この「那覇市文化振興ビジョン」は、21世紀へと引き継ぎ、市民と行政が一体となって築く「文化都市那覇」の道しるべとして、「市民文化の振興」「文化都市建設」「行政の文化化」を施策の柱として策定したものであります。

「きよらさの都市に・しほらしやの文化」とは、言いかえれば、美しい都市で心豊かな文化を、市民と行政が手を携えて創造していくという願いであり、目標であります。

私もその実現に全力を尽くしてまいりたいと思います。

市民の皆様の、ご理解とご協力をお願いするところであります。

終わりに、本ビジョンの策定に御尽力いただいた審議会委員をはじめ貴重な御提言をいただいた市民各位に、厚くお礼を申し上げる次第であります。

1995年 6 月

那覇市長 親 泊 康 晴

はじめに

第1章／文化振興ビジョンの前提	2
1. 21世紀への視点	2
2. 文化都市への期待	3
3. 那覇文化の継承と発展	3
(1) 文化とは	3
(2) 那覇の文化	4
4. 文化行政の原則	5
第2章／文化振興の前提	8
1. 那覇の文化特性	8
(1) 島嶼（南島）の歴史と文化の独自性	8
(2) 亜熱帯の風土性	8
(3) 地の利にあった街づくり	8
(4) 王都首里の形成と発展	9
(5) 海上交通の拠点・那覇	9
(6) 王朝文化と近代文化の形成	9
(7) めざましい戦後復興	10
(8) 多民俗（族）文化の受容と創造	10
(9) おおらかな市民気質	10
(10) 沖縄の中心拠点都市	11
(11) 21世紀へ向けた都市づくり	11
第3章／那覇の文化的都市像	14
1. 人間文化都市	14
2. 南島文化都市	15
3. 交流文化都市	16
第4章／文化行政の基本課題	18
1. 市民のより人間らしい生き方を求める	
心の時代への対応	18
2. 那覇らしい文化の時代への対応	19
3. 交流の時代への対応	19

第5章／文化振興の基本方向	22
1. 文化行政の視点	22
(1) 市民中心の行政の連携強化	22
(2) 交流の拠点にふさわしい魅力と機能の強化	22
(3) 実現性を高める計画調整の強化	22
2. 計画の期間の考え方	23
第6章／文化行政の基本施策	26
1. 市民文化の振興のために	26
(1) 優れた芸術文化に触れ合う機会の拡充	26
(2) 那覇市文化協会の育成と支援	27
(3) 市民文化の育成と支援	28
(4) 文化振興財団の設置検討	28
(5) 那覇市文化振興基金の拡充と有効な活用	28
(6) 市民の文化活動情報の整備	28
(7) 多彩な文化活動を育てる条件整備	29
2. 文化都市建設のために	30
(1) 那覇の歴史・文化軸の整備	30
(2) 南島文化の学術・研究都市へ	33
(3) 世界と交流する文化機能の拡充	35
3. 行政の文化化のために	36
(1) 行政の文化能力を磨くこと	36
(2) 行政内連携の強化	37
第7章／文化行政の連携の強化	40
(資料)	
1 「きよらさ」と「しほらしや」	42
2 那覇の文化特性を探る枠組み	44
3 市民のより人間らしい生き方を求める	
「心」の時代への対応	47
4 那覇らしい文化の時代への対応	48
5 交流の時代への対応	49
6 文化行政施策体系	50
7 主要文化施策展開のしくみ	51

はじめに

かつて古都・首里、商都・那覇を生きた人々は内面的なこころの優美さ、愛らしさを「しほらしや」(すふらさん)、外面的なものの美しさを「きよらさ」(ちゅらさん)と表現した。

この「しほらしや」と「きよらさ」の美感の統合美として讃えられたのが、のちに、『おもろさうし』にうたわれた「あけもどろのはな」であり、那覇市の都市像とされた「あけもどろの都市・なは」の由来だと言えよう。

「しほらしや」と「きよらさ」を求めて推進されるこの「那覇市文化振興ビジョン」は、第二次那覇市総合計画が指示する「あけもどろの都市・なは」の実現をめざす市政の柱のひとつである「個性と潤いのある文化都市」建設への基本的目標を明らかにするものである。

那覇市は、1988年(昭和63年)策定の第二次総合計画に基づく文化施策を積極的に進めているが、1992年(平成4年)には「那覇市文化行政懇話会」を設置し、

第1に伝統的にして固有な那覇の文化を継承しつつ、新しい市民文化の創造と振興に携わる市民の文化活動を支援する、

第2に那覇市の都市づくり全体を貫く個性ある歴史・文化都市のビジョンを確立する、

第3に那覇市が展開する文化施策とその関連事業の位置づけと、これを推進する行政主体の文化化を明確にする、

この3つの基本課題について『提言』を受けた。

また、平成7年3月には、「那覇市文化振興ビジョン」の策定について諮問を受けた「那覇市文化行政審議会」が、市長へ同ビジョンの答申を行った。

従って、この「きよらさの都市にしほらしやの文化」と銘打って、これから那覇市民の合意と協力により進められる「那覇市文化振興ビジョン」は、この『提言』と『答申』を基本に、那覇市の現状や行財政を展望しつつ、「市民文化の振興」「文化都市の建設」「行政の文化化」を推進するために策定されたものである。

第1章 文化振興ビジョンの前提

第1章 文化振興ビジョンの前提

1. 21世紀への視点

20世紀は二つの世界大戦と、民族独立戦争等で大きく揺らいだ年代であった。

20世紀はまた、科学技術の驚異的な発展により人類の宇宙への進出をはじめ、文明の各面に、かつてない進歩をもたらした時代でもあった。

20世紀は、長期的な冷戦構造が持続する中で人類が核戦争に脅え、各種公害の増大による地球規模の生活環境の危機に苦悩し、南北問題が深刻化した年代であった。

那覇市民にとっての20世紀、それは世界の各国民と同じように、戦火で肉親を失い、都市を焼き尽くされ、戦争と敗戦の修羅の中から生活と都市の再建を図ってきた年代であった。

この激動と苦悩、光明と危機が錯綜した世紀を生きた人類の教訓とは、核戦争の防止と平和の確立、地球環境の保存、南北問題の解消、人種や国籍、歴史や文化のちがいを超えて、人類がこの地球社会で共生・共存する方途を求めることであった。

従って、21世紀へ向かうこの時代的精神は、平和を基調としつつ、△やさしさの時代△国際化の時代△地域・地方の時代として認識されていると言ってもよいだろう。

特に、沖縄戦から長期的な米軍の占領、統治を経て、日本復帰後20年、戦後50年を迎えた那覇市民は、那覇市が琉球王朝の時代から沖縄の政治、経済、文化の中心であり、今も県都として世界に文化を発信する都市であることに誇りをもつとともに、これから那覇市が△平和とやさしさ△那覇文化の発展△国際的な文化交流を21世紀に向かう文化行政の基本にするよう望んでいると言えるだろう。

2. 文化都市への期待

市民が都市生活に期待し、享受したいことは、日々の暮らしのなかに深い文化的な感動と慰楽を覚えることであろう。

戦災から都市を再建し、市民生活の基盤を整えた那覇市が次の段階の市政の目標として設定した課題は、市民とそれを育む自然、都市が三位一体となった都市づくりであった。

それは、空と海、太陽など万物が融和して造りあげる天然の美に、市民のたくましい生命力と明日へと前進する躍動感を重ね、うるおいのある美しいまちづくりへの願望をこめた都市像として描かれた「あけもどろの都市・なは」に想定されている。

この文化都市の構想に基づく施策については、既に市民の自主的な文化振興と文化都市の建設を柱に、各面において積極的に展開されているが、更に県都那覇に寄せる県民や国民的な立場からも、拠点文化機能の一層の拡充、那覇らしさの形成が強く期待されている。

3. 那覇文化の継承と発展

(1) 文化とは

文化とは、人間の創造活動を基本とし、芸術や教養といった分野を中心に、人間がより人間らしい生活を営もうとする創造であり、人間の心を豊かにする活動とされる。それは、同時に人間の心と心を結びつけ、社会を豊かにする活動ともされている。

一方、見方をかえて文化とは「人間が学習によって社会から習得した生活の仕方の総称。衣食住を初め技術・学問・芸術・道徳・宗教等物心両面にわたる生活形成の様式と内容」（広辞苑）とされる。だが、これは文化の一般的な概念規定であって、人類が地球のそれぞれの地域社会から習得した生活の仕方は千差万別であり、気候や風土によって衣食住のあり方や宗教も異なり、生活形成の様式と内容も多様な形態をとり、個性化してきたものである。

従って、那覇の文化とは、四方海に囲まれた島嶼の那覇という地域において、その自然的、社会的条件の中で、那覇市民が培ってきた生活様式、価値意識、行動準則の総称ということになる。

(2) 那覇の文化

今日、那覇の文化を概観すると、建造物や絵画、古文書などの有形文化財、音楽、演劇、工芸技術などの無形の文化的所産、衣食住、なりわいに関わる風俗習慣、民俗芸能とそれに用いられた衣装、器具、祭祀跡などの物件、貝塚、古墳、城跡などの遺跡や庭園、橋梁、海浜などの名勝地、固有の動植物などの記念物、伝統的な建造物群に分類され継承されている。

この分類による那覇の文化を象徴的に列挙すると、再建された首里城を中心に、玉陵、崇元寺石門、三重城跡など、那覇が古来より王都、港町として発展してきたその歴史を物語る建造物、首里王府において中国からの冊封使を歓待するために創作された組踊を中心とする琉球古典芸能と王朝料理、庶民の農耕、漁労に伴う祭祀と民具、民俗行事があげられる。また、『おもろさうし』をはじめ那覇の風物や人々の心情を詠んだ数多くの民謡とそれに伴う歌舞、「泊阿嘉」、「渡地物語」、「首里城明渡し」など、沖縄芝居も多彩である。

市民の衣食住においては、来訪者や民俗学者を驚嘆させた赤瓦の街並み、紅型や首里織、壺屋焼の陶器や漆器、足てびちを中心とする豚肉料理が代表するように、文化資源やその形態には、実に多様なものがある。

およそ3万年も前に、山下洞穴人が那覇に住みはじめて以降、那覇に港がひらけ、首里に琉球王朝が成立し、那覇は王都として栄え、かつ、薩摩の琉球入り、明治政府による琉球処分を経て、沖縄県の県都となる過程で近代化した。

しかし、琉球王朝文化を基層として明治、大正、昭和へと続く近代過程で形成された文化的所産の多くは沖縄戦で壊滅したが、戦後の米軍統治から、1972年5月15日の本土復帰にいたる歴史過程で文化も再生し、その後今日にかけて築きあげてきた文化的所産は、実に多彩を極めている。日本民俗学が南島文化を創造してきた人びとの精神は、「愛（かな）しさ」にあるといい「しほらしや、きよらさ」の文化が、その精神によって築かれたところにその特徴があるとされる。

この南島文化を伝統的な基盤として、戦後長期にわたる米軍統治から今日にかけての国際的文化交流により、若者文化が各ジャンルに登場し、さらに、北は奄美から南は与那国まで、各郷友会が持ち込んだ民俗文化も加わって、那覇の文化は隆盛をきわめ新たな発展の段階を迎えている。

4. 文化行政の原則

これからの文化行政の基本は、市民が自らの感性に基づいて創造し発表する文化的行為の自由と権利を尊重し、これを支援すると共に、市民の主体的な文化活動が、効果的に展開できるよう文化性豊かな都市づくりを推し進めることと、これを推進する主体としての都市行政が市民自治に徹し、行政の自己改革、文化化がはかられることにある。

従って、文化行政の推進にあたっては、市民文化の振興の為には、これを「サポートはするが、コントロールはしない」こと、市民の文化創造と発展に対応できる条件整備を図ること、行政の文化化を促進することを原則にしなければならない。

第2章 文化振興の前提

1. 文化振興の前提

第2章 文化振興の前提

第2章 文化振興の前提

1. 那覇の文化特性

(1) 島嶼（南島）の歴史と文化の独自性

那覇は、日本の西南に展開する島嶼群の主要島である沖縄県の県都であり、明治以前の琉球王朝時代は、首里を王都に那覇を商都として栄えた都市であった。

また、那覇は環支那海の東端に位置し、古来から「海上の道」としてそこを往来した文化から強い影響を受けつつ、これを受容して独自の文化を形成した。

(2) 亜熱帯の風土性

那覇は、東京から海を隔てて南西に1,480kmの位置にあるが、その距離の範囲には、北京、平壤、ソウル、香港、マニラ、台北等の主要都市が展開する。この都市群の中でも、那覇は亜熱帯モンスーン地帯に属し、温暖で湿潤に富む気候は、固有な風土と動植物、自然景観を作り出すと共に、その風土に融合した集落、農耕、漁労とそれにとまなう祭祀・民俗を発展させ、のちに、南島文化と呼ばれる固有の文化を形成した。

(3) 地の利にあった街づくり

地誌的に見た那覇は、全体として隆起珊瑚礁をその基盤とし、首里台地から流れる国場川と安里川の河口部に那覇港と泊港が形成され、両河川がとりくむ幾つかの支流に沿って展開した干潟や浅瀬に初期の集落が建ちはじめ、那覇はこの“浮島”をルーツとして都市づくりが始まった。

首里の石灰岩台地には、首里城を中心に中国伝来の風水思想に立脚したまちづくりが展開され、沖縄戦で焼き尽くされる以前の那覇は、「自然と歴史、人文が調和した風格ある都市」、「人巧、天巧両（ふたつ）ながらその美をほしいままにする」と讃美された。

(4) 王都首里の形成と発展

中山王尚巴志が三山を統一し、首里に王城を構え、尚真王の時代に各地の按司や祝女を首里に集め、首里は王国経営の政治拠点となり、「おもろさうし」や歴史の編纂、社寺の建設など文化の中心地ともなり、さらには中国、東南アジア、日本、朝鮮とも外交や貿易を展開するなど、首里は琉球王国の王都となった。

(5) 海上交通の拠点・那覇

那覇港、泊港の両港を擁する那覇は、諸外国との交易・交流や琉球王国内の各島嶼を結ぶ重要な海上交通の拠点として活気を呈し、これが今日の那覇港、那覇空港の基盤となり、往時の商業の中心である那覇四町は、今日の商都・那覇の土台となり、那覇は王朝時代から今日にかけて、文化や情報の発信、受信、再発信の中心都市となっている。

(6) 王朝文化と近代文化の形成

およそ500年に及ぶ首里王朝は、古来から琉球各地に伝わる祭祀芸能やおもろ歌謡を母体とする芸能文化の創造に力をいれ、今日、古典舞踊とよぶ老人踊り、若衆踊り、二才踊り、女踊り、雑踊りを集成、古典劇としての組踊を創作した。

「御冠船踊り」といわれたこの古典劇が各間切りにも伝わり、各地の地域性をとりくみつつ定着発展する過程で、三線の普及による島うた、民謡も次々と登場し、那覇では商業演劇が開始される。

更に、美術、工芸、建築、服装、食文化の創造発展とつながり、戦前の那覇の文化は多彩を極め、そこを訪れる旅人の目を魅き、心を慰めた。

(7) めざましい戦後復興

この那覇は、昭和19年10月10日の米軍による那覇大空襲に始まる沖縄戦で壊滅し、多くの市民の生命、財産、とくに王朝時代から築いてきた文化財を失った。

戦後の復興は、戦火のなかを生きのびた市民が、米軍の許可を受けながら入市し、開始された。

米軍占領からその長期の統治下において、幾多の困難を克服しつつ、那覇市民は都市の戦後復興に成功し、今日、戦災都市としての那覇を終結させるまでの都市再建をなし遂げたことになる。

この都市再建には、実に50年の歴史を必要とした。

(8) 多民俗（族）文化の受容と創造

今日の那覇の文化は、首里・那覇・真和志・小禄の伝統的な庶民文化と、海外の異文化を吸収して形成した琉球王朝文化、近代において日本を中心として受容した外来文化、戦後復興過程で都市那覇へと集中した人口が各地から持ち込んだ郷友会文化、米軍統治との関わりで流入した欧米文化、最近における中国、東南アジア、アフリカ等各国との交流による文化、伝統的な沖縄文化を創造、発展させ、全世界への発信をはかっている若者文化が融合し、これが同時に発信され文化隆盛の状況にある。

(9) おおらかな市民気質

那覇人氣質と首里人氣質を対比的に“ナーハイバイ”と“シュリジュリ”と言うが、他にも那覇を中心に沖縄の地域社会を生きてきた人々の気質をとらえた表現は多い。

チムジュラサ（肝きよらさ）、イチャリバチョーデー（人間、行き逢えば皆兄弟）で表現される情愛のこまやかさ、南島の風土性から生まれたテーゲー（中途的）、チルダイ（心身の筋が緩んで、やる気がでない）などという伸びやかな気質が、逆に根気強さ、せっかちでなく、おおらかで何事も最後までやり遂げる市民気質を培っているとされる。

(10) 沖縄の中心拠点都市

那覇は、人口31万人、商業・業務を中心に国の出先機関をはじめ、政治、経済、文化などの中枢機関が立地する名実ともに沖縄の県都である。

那覇は、県内の各離島や地域の文化が出会い交流する都市であり、国際空港・港湾が開け、国際的な人々と文化が交流する都市であり、再建された首里城を中心に、歴史と文化、伝統的な物産や工芸施設の集積も高く、宿泊施設、商業アミューズメント施設も都市地区に集中立地しており、年間を通じて観光客が訪れるダウンタウン機能も担っている。

(11) 21世紀へ向けた都市づくり

かつて那覇は地域の3分の1を米軍基地として使用され、これが都市計画の大きな障害とされてきた。しかし、市内の米軍基地は徐々に開放され、返還された土地には、21世紀へ向けた都市づくりが進行しつつある。

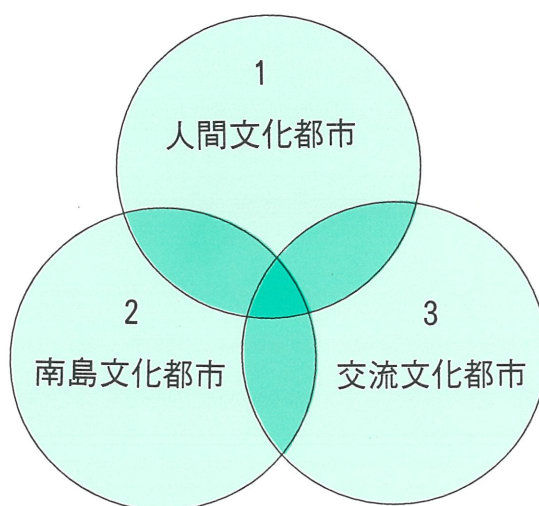
特に、天久の新都心地区では、県立博物館や県立美術館、那覇市総合文化施設、生涯学習センター等の施設設置が検討され、那覇を中心とする都市圏の文化ゾーンとして大きく生まれ変わろうとしている。

第3章 那覇の文化的都市像

第3章 那覇の文化的都市像

那覇の文化的特性は、幾つもの個性的な表情を併せ持っており、文化活動の諸元も、きわめて多様なものがある。

那覇のこの文化個性を統合し、さらに、これからめざすべき那覇市の文化都市像を次のとおり設定する。



1. 人間文化都市

「平和」「文化」「生活」を理想都市の建設目標に揚げて市民主体のまちづくりを進める人間文化都市

那覇市の都市づくりの目標は「人」と「自然」と「都市」が渾然一体となった「あけもどろの都市」であり、その目標を実現するために「平和都市」「文化都市」「生活都市」の都市像を揚げて、市民の主体的なまちづくりへの連帯による都市づくりを推進している。より人間らしい生き方を求める市民の主体的な行動力を支援し結集していくこと、そして市民と協働していくことが那覇市の基本的な姿勢である。

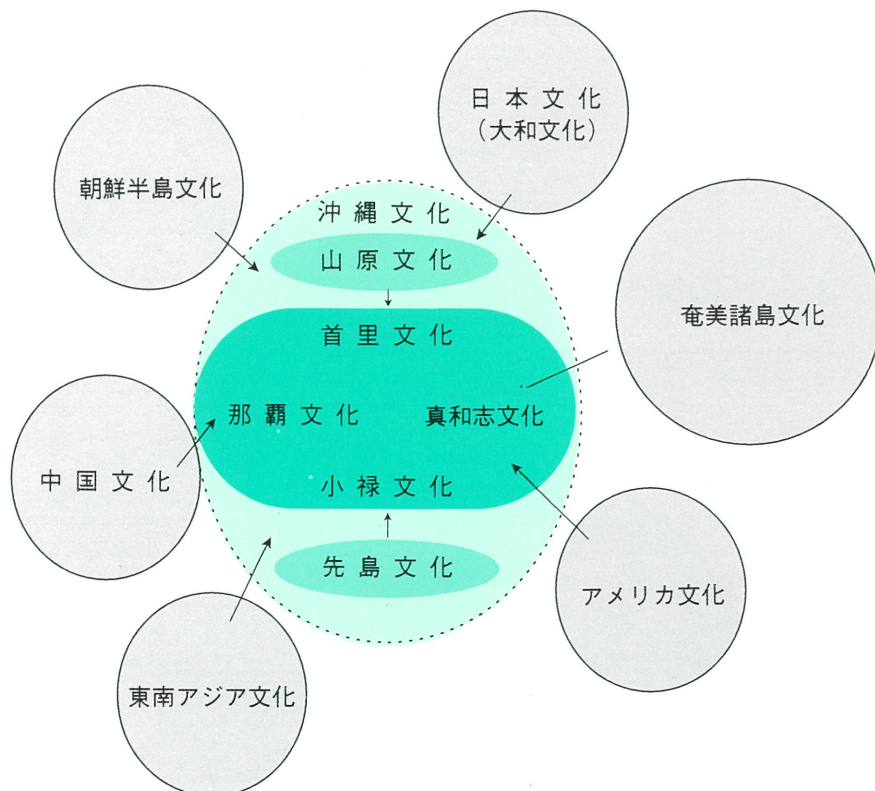
2. 南島文化都市

環太平洋圏の文化を基層として個性を創出してきた南島文化都市

那覇市の文化は、首里王国時代のアジア全域との交易交流時代を通じて、また移民として先達がきりひらいた交流や米軍統治下での琉米交流等を通じて、独特の個性を築き上げてきた。

芸術文化、まつり文化、食文化等々の那覇文化の個性は、環太平洋圏の文化が那覇市の気候風土・人情に合致した形で集大成されたものである。こうした、那覇文化の個性は、日本の文化の中では日本文化の源流を伝えるものや、強く異国情緒を感じさせるものまで実に幅広く多彩で、市民生活に密着した形で息づいている。

那覇・南島文化の構造



3. 交流文化都市

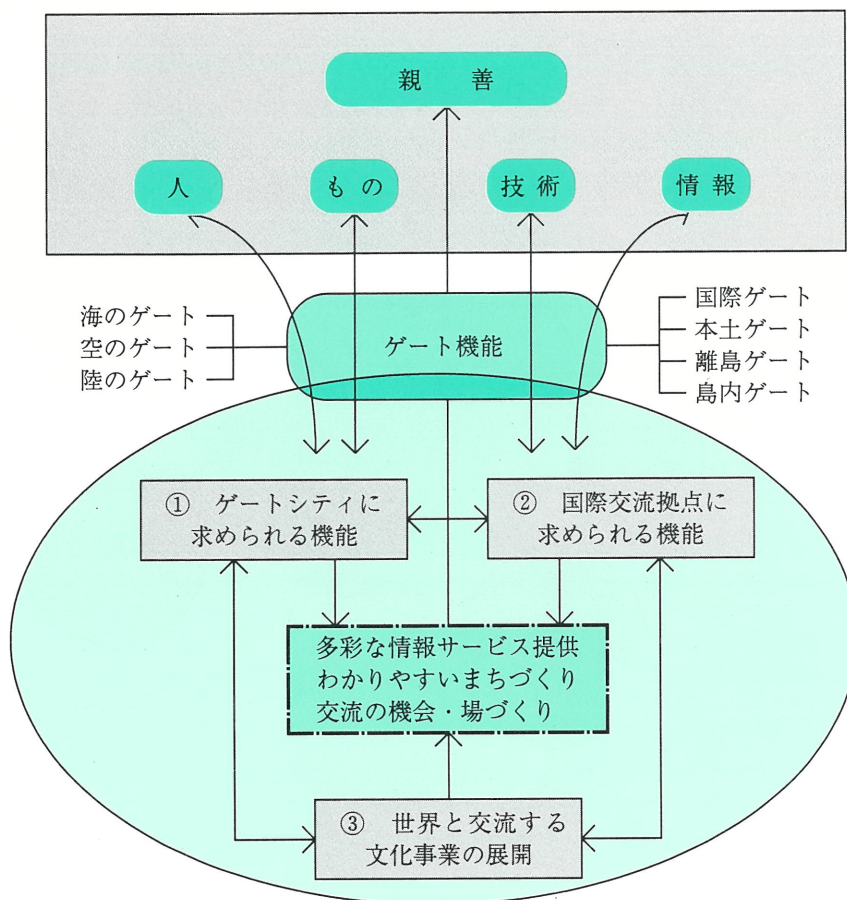
多彩なネットワークを形成し、蓄積してきた沖縄県の顔である交流文化都市

那覇市はすでにこれまでに、多彩な文化交流ネットワークを構築しており、交流拠点都市のイメージを内外にアピールしている。ホノルル市、サンビセンテ市、福州市をはじめ日南市などとの姉妹都市・友好都市提携に伴う交流、世界のウチナーンチュを結ぶ親善交流、空手や民俗芸能を通じての民間交流、多様な経済交流や学術交流活動、観光来街者とのふれあいなど枚挙にいとまがない。

これは、かつて王都首里が那覇港を門戸として展開してきた豊かな海外交流・交易の歴史の蓄積の上に、その基盤が築かれてきたといっても過言ではない。

沖縄随一の歴史文化都市那覇市は、現在県都として、また県外、国外に開かれた本県のゲート都市として、県内外を結ぶ多様なネットワークの中心拠点である。そのことによって那覇市は全国レベルで、また世界レベルでパワフルな文化都市として確たる存在であり続けることが期待されている。

那覇市に求められる国際交流の機能



第4章 文化行政の基本課題

第4章 文化行政の基本課題

これから21世紀に向かう社会は、高齢化、国際化、情報化、都市化の現象を基調として進行するものと展望され、那覇市も基本的にはこの時代潮流に対応しつつ、市民を取り巻く価値観の変化と社会経済環境の進展に見合った文化行政の展開が必要とされる。

そこで那覇市は、市民のニーズや県都に期待される文化行政の基本課題としての次の3点を掲げる。

1. 市民のより人間らしい生き方を求める心の時代への対応
2. 那覇らしい文化の時代への対応
3. 国際的な交流の時代への対応

1. 市民のより人間らしい生き方を求める心の時代への対応

市民の主体的な文化活動を支援し、市民の文化活動の展開にふさわしい都市建設を推進する。市民の文化活動については、那覇市文化協会に参加する各ジャンルの芸術文化の育成と支援を図り、文化行政においては、人（意識）づくり、施設づくり、仕組みづくりを推進する。

2. 那覇らしい文化の時代への対応

都市はその都市ならではの個性を築きあげることが必要である。那覇は那覇らしい文化が市民の各部門の文化活動に息づき、市民の文化意識に支えられ、これを反映した都市空間が開け、全市に多様な文化施設がネットワークされていることが望まれる。

那覇市の豊かな文化の蓄積が、新しい文化創造のエネルギーとして十分に発揮され、那覇らしい文化が培われる施策を推進する。

3. 交流の時代への対応

那覇は、文化と物質の交流交易において既に琉球王国の時代から国際交流の拠点都市であった。

那覇が今後とも活力と魅力に溢れた都市として確たる光を放ち続けていくためには、日本の南の交流拠点として、日本の中での沖縄の役割を担い、アジア諸国をはじめ、ホノルル、サンビセンテ、福州市の友好姉妹都市を中心に、国際的な文化交流が一層強化される必要がある。

第5章 文化振興の基本方向

第5章 文化振興の基本方向

1. 文化行政の視点

(1) 市民中心の行政の連携強化

文化行政は、市民一人ひとりを文化的存在として、その人権が尊重され、人間らしい生活をしようとして営む創造的にして文化的な活動を、行政の役割として担うことである。また、これまでややもすれば「モノ」づくりに偏りがちなまちづくりから、都市に住む人々の「ココロ」を重視し、歴史や伝統を伝え、その継承と創造的發展で未来につながる文化をつくりあげることが必要とされる。

そのためには、市民の文化意識の高揚を根幹にして、文化活動の環境整備、文化振興の推進体制の整備をめざし、相互に有機的に連携しあって機能する行政へと転換することが必要である。

(2) 交流の拠点にふさわしい魅力と機能の強化

これから21世紀に向けて、那覇は、中国をはじめ周辺諸国との距離が一層縮まり、那覇空港や那覇港湾のゲート機能はその拡大整備が必要である。

世界につながるこのゲートから都心地域、新都心地域、住居地域へと展開する那覇は、県都としてのより高次の中核機能と都市的魅力を備え、日本の南の拠点、周辺諸国への文化発信の都市として整備されることが必要である。

(3) 実現性を高める計画調整の強化

文化は、市民にとって根源的、全人間性に関わるものである。従って、文化行政も、文化行政の部門別な行政の領域ではなく、行政全体に関わる基本的なテーマとして設定し、行政の計画や事業の情報を文化的な視点から整理し、推進する施策体系をつくりあげていくことが必要である。

2. 計画の期間の考え方

この計画は21世紀へ向かう文化行政の視点を基本にし、1995年（平成7年度）から2004年（平成16年）の10ケ年計画とする。

なお、計画の前半期には、第3次那覇市総合計画が策定されることになっており、その部門別計画としての本計画は、総合計画との整合性が問われることになり、部分的な補完や修正等、調整が必要とされることもあり得る。

第6章 文化行政の基本施策

第6章 文化行政の基本施策

1. 市民文化の振興のために

那覇は、王都首里、商都那覇の形成とともに、こころの文化、ものの文化が豊かに育ってきた都市であり、その歴史的、伝統的集積については南島文化の宝庫、沖縄学の中心地として注目されてきた。今日、琉球王朝文化と庶民文化が融合し、その多様な歴史展開によって形成された芸術文化を豊かな文化土壌とする那覇市には、内外から多くの優れた芸術文化が流入し、これと競うように、沖縄各地域や奄美諸島、宮古・八重山や各離島からも各郷友会が持ち込んだ民俗文化が市民やグループ、郷友会によって展開され、さらに企業が主催する文化行事も毎日のように開催されている。

この市民文化をさらに活性化し、その振興をはかるためには、行政が内外の優れた文化と市民との出会いをつくり出すと共に、王朝時代から伝わる伝統や精神文化、生活文化を受け継ぎ、これからの文化創造につながる豊かな感性と発想力を養うための教育が必要である。そして、市民の主体的な発意と文化意識の高揚を図りつつ、しほらしやの文化が育ち、息づく都市づくりをめざし次のとおり市民文化の振興を積極的に推進する必要がある。

(1) 優れた芸術文化に触れ合う機会の拡充

- 市民に内外の優れた美術、音楽、文学、演劇などの鑑賞機会を拡大・充実する。
- 那覇文化サロンの設置
(人材や情報の交流と企画会議の開催・那覇文庫の設置)
- 市の文化事業でのプロデュース事業の導入
(外部・内部・市民のプロデュースの相互協力)
- 多彩な創作コンクールの開催
(文化領域の広がりを図る)
- 市民文化活動賞、市民が選ぶ文化賞の制定

(2) 那覇市文化協会の育成と支援

- 那覇市文化協会には、16部会、3,000人の市民が参加し、既に総合文化祭の開催など、市の支援により積極的な文化活動を展開しており、今後ともその支援を続け、市民文化の活動主体として育成する。

那覇市文化協会の現況

部 会 名	部会の会員数	部 会 名	部会の会員数
華 道	291	音 楽	55
日 舞	174	書 道	247
フラワーデザイン	90	生 活 文 化	87
生 活 美 術 工 芸	171	民 踊	299
茶 道	136	洋 舞	12
民 謡	110	フ ェ ェ ク ダ ン ス	12
文 芸	119	他 芸 能	7
詩 吟	148	そ の 他	19
写 真	89	演 劇	4
古 典 芸 能	918	合 計	3,202
邦 楽	122		
美 術 工 芸	92		

(3) 市民文化の育成と支援

- 地域の祭祀、まつりの再生や地域の文化まつりの育成
- 若者交流文化祭など若い世代の文化エネルギーの発揚と支援

(4) 文化振興財団の設置検討

- 那覇市文化協会に参加する各部門の文化活動の支援、優れた芸術文化の創造者、学術文化の研究者、小説、詩などの文学作品の発掘育成、内外の優れた芸術、学術文化との交流など、市民文化の振興を図るため、那覇市文化振興財団の設置を検討する。併せて、那覇市文化振興条例（仮称）の制定も検討する。

(5) 那覇市文化振興基金の拡充と有効な活用

- 市民の文化創造を促し、市文化協会の文化活動を拡充するため、基金の効果的な活用を図る。

(6) 市民の文化活動情報の整備

- 市民に週間版ないし月間、半年間文化情報の提供
- テレビ、ラジオ、CATVによる文化情報の提供
- 若者、女性向きのタウン・カルチャー情報発信のしくみづくり
- 市民の自主情報誌づくりの啓発

(7) 多彩な文化活動を育てる条件整備

市民の多様な文化活動のニーズに応え、優れた芸術文化との出会いを確保するためには、文化活動の環境整備が重要である。

那覇には、県立博物館、県立郷土劇場をはじめ、那覇市民会館、パレット市民劇場、市民ギャラリー、県立図書館、中央図書館、公民館、民間の文化ホール、ギャラリー、マスコミ各社の催し物会場が展開し、毎日のように文化行事が展開されている。

今後は返還された基地跡地、那覇新都心での県立美術館、県立博物館新館の建設が計画され、那覇市も（仮称）総合文化施設、生涯学習センター等の建設が検討されており、21世紀に向けて文化施設は急速に整備されていく状況にある。

そのため、今後は大小の文化施設を有機的に結びつけ、文化のネットワークづくりを急ぐ必要があり、そのために新しい施設の建設促進、既存施設の整備、これを有効に活用するため次の施策が必要とされる。

- 那覇市内に国立組踊劇場が建設されるよう、その誘致促進を図る。
- 天久の那覇新都心における県立博物館新館、県立美術館の建設促進を図る。
- 那覇新都心における（仮称）那覇市総合文化施設の建設促進を図る。
- 那覇市民会館、パレット市民劇場、市民ギャラリーを市民の文化の発信、受容の場として、施設機能の拡充、文化サロン機能の設置、運営審議会の充実を図る。
- 市役所及び各支所をはじめ地域の公民館や公的施設のシティホール、ギャラリー機能を拡充し、その文化的活用を推進する。
- コミュニティ振興事業や生涯学習推進事業との連携により、市民の徒歩圏域の文化活動コアとして、公的施設、民間施設をつなぐデータベースの形成とネットワーク化を図り、文化活動の情報提供を積極的に推進する。

2. 文化都市建設のために

那覇市を文化都市として建設整備することは、市政の基本目標である。

「あけもどろのはな」を都市像として、その実現をめざす市政の柱のひとつとして推進されている文化都市とは、市民の文化活動の展開に相応しい都市、市民の多様な文化活動が、市のどの地域でも息づき、その息吹がどこからでも伝わってくる都市空間、市民文化のステージとして建設整備されることを言う。

これから21世紀に向けて、内外に豊かな文化都市のすがたを鮮明にするには、文化のコアとコアを結びつける文化都市としての軸線を設定し、これと対応して、市域全体を文化とコミュニティのスペースとして整備することが必要である。

つまり、これからは、住宅、公園、商店街、道路、川、海浜などの都市を構成するあらゆるものを文化資源として活かしていき、それが、その地域で生活する市民の日々の営みの中にとけあって、文化的な潤いを醸し出すよう、総合的なまちづくりを、しほらしやの文化が育つきよらさの都市づくりを、市民参加によって進めていくことが必要とされる。

そのための基本施策として、次のことを推進する必要がある。

(1) 那覇の歴史・文化軸の整備

● 古都首里文化ゾーンの機能の拡充

首里城公園を中心とした首里景観指定地域の景観づくり、首里における歴史ストックと県立芸術大学の文化施設周辺の工房群を結ぶネットワークの整備、首里まつりの整備、壺屋焼物博物館等の建設により、歴史と文化、工芸のまちとしての地域個性を形成、拡充する。

● ウォーターフロント文化ゾーンの形成

那覇港周辺区域内の泊ふ頭を中心に展開している「ポートルネッサンス21」と関連し、海の博物館や離島文化センターを整備し、海辺を活かした憩いの文化ゾーンとし、漫湖公園等の水辺を、渡り鳥観察をはじめとする自然とふれあえるゾーンとして形成する。

● 歴史と文化ゾーンの整備

首里城から綾門通り、国際通り、泊ふ頭にいたる那覇東西を結ぶ文化軸を設置し、那覇の歴史文化ゾーンとして整備する。

● 新しい文化軸の整備

那覇新都心、小禄金城地区の二つの文化コアとこれを結ぶ新しい文化軸を整備する。那覇新都心地区には、インテリジェントシティーとして建設促進される地域特性と対応し、文化情報拠点の形成、官・民の高度な文化機能を集中的に誘導し、文化アカデミー拠点、国際交流、企業メセナの機能を集約、21世紀に向けた国際的な文化ネットワークの拠点を形成する。

小禄金城地区を中心とする地域には、臨空港地域としての地域特性を活かし、産業と伝統工芸の施設整備と機能拡充を図り、市民福祉の拠点施設と文化分野を融合させ、相互に有効に機能しあうふれあい交流ゾーンの形成を促進する。

● 文化施設のネットワーク化

南北の拠点と既成市街地に立地する各種商業、業務の集積がつくりだす都心性や界限性の魅力を高め、那覇市民会館、パレット市民劇場、市民ギャラリー、ホール、シアター群を結びこれを全体として演出することにより、文化創造の都市軸を浮かび上がらせる。

● 20世紀記念塔の建立

那覇新都心には、20世紀記念塔を建立し、20世紀を生き抜いた市民の誇りと、戦火の中から都市を復興し、再建した記念として21世紀の市民に平和への意志を伝達する。

この20世紀記念塔は、県立「平和の礎」が死者の鎮魂により平和を祈念することに対し、悲惨な沖縄戦を生き抜いて、不死鳥のように立ち上がり、生活と都市を今日の姿にまで築きあげた「生者の礎」として、21世紀の市民に平和の意志を伝えるものとして建設することを検討する。

● 都心機能の文化的再生、再開発による業務・文化ゾーンの形成

国際通り、平和通りを中心とする拠点都心機能の増進をめざし、行政コアと商業業務コアの複合的な吸引力を高め、再開発事業と関連した業務・商業・文化ゾーンの再生と付加を図る。

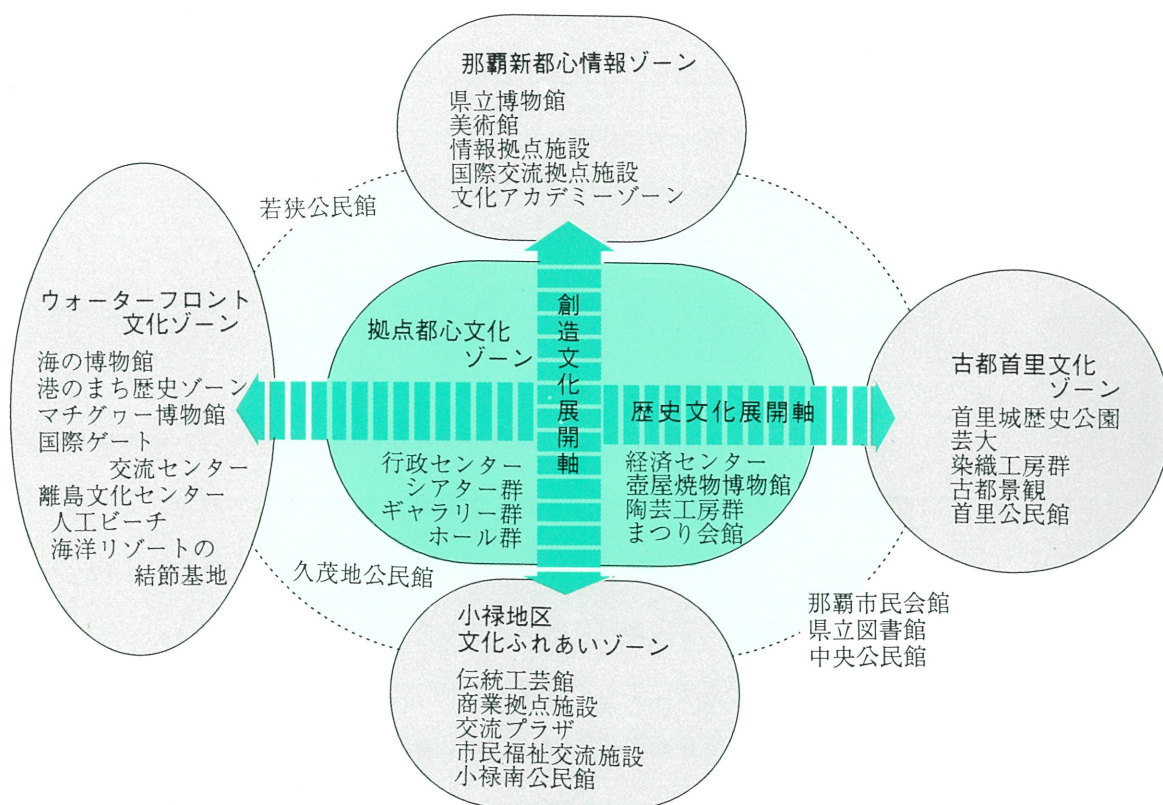
● 都市を文化的ステージに

都市空間にまつり空間としての魅力と機能を備えた広場づくり、道づくりを進め、街角が市民のパフォーマンスやコミュニケーションスペースとして、文化的に活用され、文化的なステージとなるよう都心環境を整備する。

● 文化環境の整備

都市には、いたるところに歴史や文化との出会いがあり、表情がある。この出会いと都市の表情をより確かなものとするため、市内の旧跡と歴史的地名等を表示する事業を推進し、市民に親しめる文化環境を整備する。

文化都市・那覇の骨格構想



(2) 南島文化の学術・研究都市へ

潤いと魅力に満ちた都市とは、その都市ならではの自然と歴史に培われた伝統の文化が、都市の個性と奥行きをかもしだしていることをいう。

伝統文化は、都市の原風景の中に潜んでおり、これが市民の文化的創造や都市づくりに活かされることが、切実な課題とされる。そのためには、那覇の歴史と伝統文化の諸元を探り、広く学ぶことが必要である。

● 尚家継承文化遺産に出会える都市

琉球王朝の文化遺産として、歴代の尚家当主によって保存されてきた、古美術品や公文書が那覇市に贈与されることになった。

この極めて貴重な文化遺産を保存・展示し、学術的にも、琉球王朝時代とその後の歴史と文化をよく深く理解することは、市民と都市のアイデンティティ確保にとって重要な課題とされてきた。

尚家継承文化遺産の保存・展示施設として市は、那覇新都心に総合文化施設（仮称）の建設を促進しており、これが実現すると、王朝文化との市民の触れ合いは勿論、広く南島文化の学術・研究都市へと向かうことになる。

● 横内家文化遺産の活用

明治時代に歴代知事のもと、初期沖縄県政の確立に当たった横内扶家に伝わる沖縄関係の文化遺産（主として古美術・古文書）も市に贈与された。

この中には、極めて貴重な絵画や明治初期の行政文書が多数含まれており、沖縄近代の歴史や文化、行政が更に解明されるものと注目されている。

尚家継承文化遺産により、首里王朝時代から明治初期にいたる歴史・文化の研究が進み、これが明治初期から大正にいたる横内家の継承遺産の解明とつながることによって、那覇の歴史と文化が一層豊かになるよう対処する。

● 歴史・文化学術事業の強化

市史編集事業や歴史、民俗資料収集事業等で蓄積された学術・歴史・文化資料が広く市民の文化的生活に活用されるよう展示、鑑賞の施設を整備する。

- 文化の活性化

文化の総合祭典や自主企画祭（展）を開催し、那覇文化を支える市内各地域や郷友会文化の競演を催すなど、文化活性化を図る。

- 専門職員の養成

尚家継承文化遺産、横内家贈与の美術品、古文書の研究、ギャラリー等の文化施設運営のため学術、学芸の専門職員を養成する。

(3) 世界と交流する文化機能の拡充

首里城と那覇港は、歴史的な国際交流の象徴である。

現代は、世界の人々が国境を超えて交流し、異文化と触れることによって生活を豊かにする時代である。この国際交流の時代に備え、市民文化を世界に向かって発信し、世界の文化を受容するための高次の拠点中枢機能を次により整備することが必要である。

- ゲートシティ機能の整備

県下の文化活動情報の提供、各地の芸能や歴史文化情報が映像で視聴できる視聴覚ライブラリーの設置を検討し、空港、港湾、アクアポリス等における文化的サービス機能を拡充する。

また、世界に那覇文化を発信する文化的人材を育成し、外国語版の文化紹介パンフレット、ビデオの作成、外国語標識の設置も推進する。

3. 行政の文化化のために

市民の多様な文化活動が展開されるためには、そのステージにふさわしい都市が必要であり、都市を文化的に整備する構想や施策には、当然、市民の文化的活動の活性化が期待されているといえよう。

さらに、市民の文化活動が活発に展開される都市が建設されるためには、これを推進する行政主体に文化意識が形成され、行政そのものが文化化されなければならない。

つまり豊かな人権感覚を持ち、市民を大切にする視点と市民自治を基本とする職員集団により、行政の文化化が徹底されることが必要である。

那覇市職員は、市の「総合計画」により市政の各分野における専門集団として、豊かな発想や構想力を培い、優れた企画力を発揮し、市民の立場から市政の改革を図る資質が要求されているが、さらに、この資質には、文化的な視点が加わっていることが必要とされよう。

文化を視点に行政を計画し、実施する、この行政の文化化は、文化都市那覇の建設を担う行政とその推進集団である市職員の基本的目標であり、その実現のために次の課題に対処することが必要である。

(1) 行政の文化能力を磨くこと

- 全ての行政の事務事業を文化的視点から問い直し、豊かで個性的な都市づくりを促進する。

文化の視点とは、人間性、自然性、地域性、創造性、美観性、快適性から事務事業を問い直してみることをいう。

- 事務事業を文化の視点から問い直し、これを文化アセスメント（事前評価）制度として設定し施設づくりにおいても、美しさ、快適さ、調和などを重視し、潤いのある施設づくりを推進することである。
- 施設づくりにおいては、その設計段階から景観に留意し、デザインアドバイザーの意見を聴取することが必要である。
- 市の公共施設づくりには、デザイン、設計に工夫を凝らし、文化性にみち、地域の市民に親しまれる施設づくりを進める。

(2) 行政内連携の強化

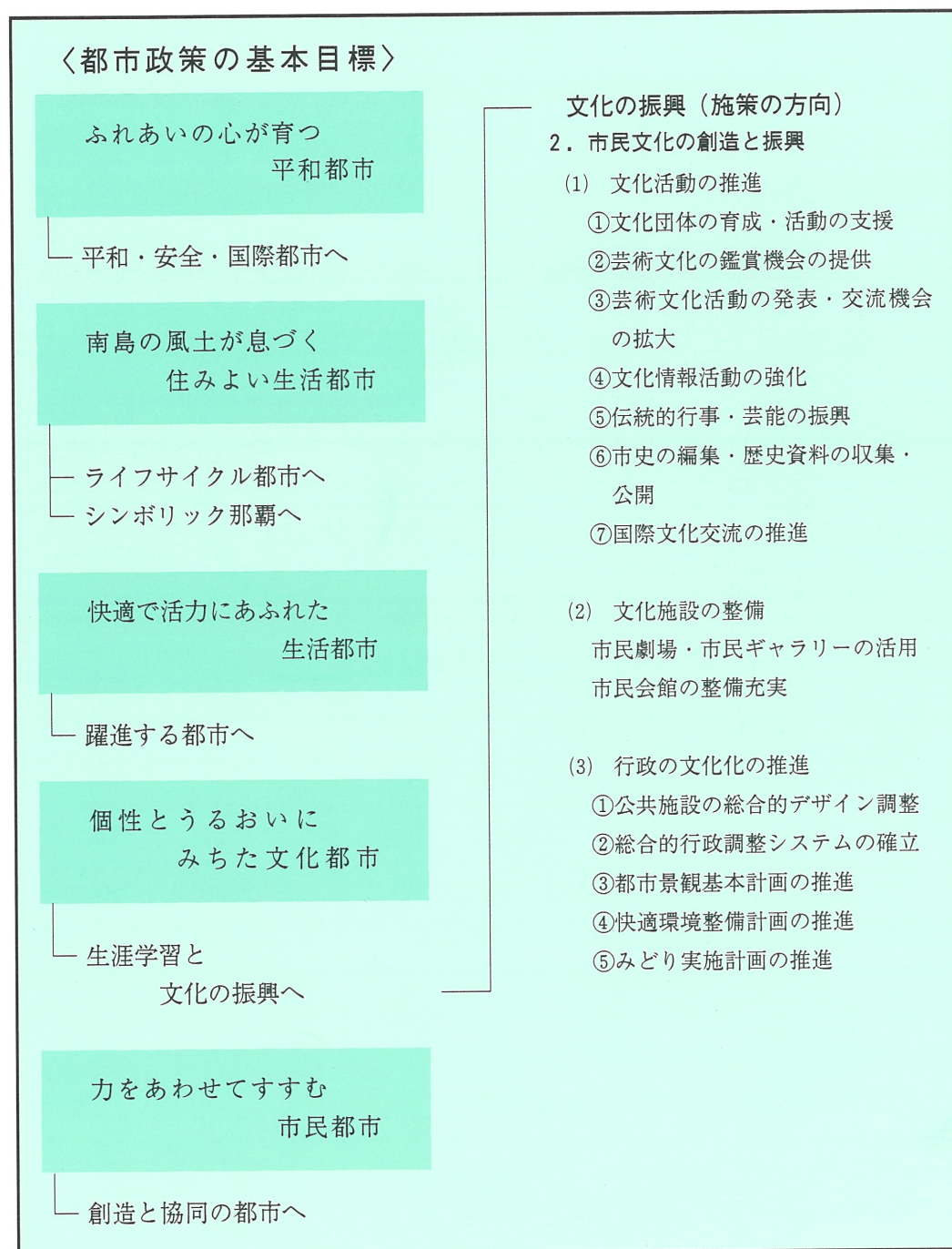
- 時代の変化に対応し、文化行政の視点に立った組織、機構の整備拡充、強化に努めること。
- 文化振興の核となる人材の登用、ラインと別格のスタッフ会議の設置とその機能化を図ること。
- ハード部局とソフト部局との文化行政を総合調整するセクションの設置を検討すること。
- 那覇市文化白書（那覇の文化＝こころとものの文化事典、文化施設一覧表など）を作成。
- 市職員による行政の文化化の研修
（先進地より人材の起用、講師の招聘、自主、職場研修）
- 県下第一の文化拠点として、また南島民俗、文化の拠点として、更にはアジアへと開ける交流文化都市として、県内各市町村をはじめ、広域的な学術交流、文化、技術交流を推進する。

第7章 文化行政の連携の強化

第7章 文化行政の連携の強化

第二次那覇市総合計画では、広い意味での文化行政の推進体制が、次のように位置づけられており、今後もこの施策体系に大きな変化はないものとみて、相互の連携強化が図られることになる。

文化行政の位置づけ



== 資 料 ==

「那覇市文化振興ビジョン」資料

資料1

「きよらさ」とは

ウチナーグチに「うつくしい」という語はない。

一般的な「美」を表現する「うつくし」「うつくしい」に相応しい語を探すとすれば、「きよらさ」「チュラサン」がそれにあたる。

琉歌の世界では、美しい、きれいである、立派であるという美感は「きよらさ」という語で包まれている。

「しほらしや」とは

「きよらさ」が対象の美を視覚的にとらえることが、多いのに比べ、「しほらしや」は花の匂いや琴の音などを対象とした臭覚、聴覚が中心であるのが特徴である。

「きよらさ」が美一般をいわば外面的に表す語であるのに対し、「しほらしや」は愛らしくゆかしく、上品優美で、慈しむべき対象に対する美感を臭覚、聴覚を通して内面的に表現する語と言える。

視覚によってとらえた感性的な美感が、人間の精神をくぐり、より深まっていくところに、「きよらさ」の美感から「しほらしや」という精神的な美感への深まり、広がりが見られるのではないだろうか。

外 間 守 善 「沖縄人像を探る」より

沖縄タイムス1988年

6月7日～9日 朝刊

「きよらさ」を詠んだうた

一 天に鳴響む大主^{とよ うふぬし}

明けもどろの花の咲いわたり

あれよ 見れよ 清^{きよ}らやよ

又 地天鳴響む大主

「おもろさうし巻379」

「しほらしや」を詠んだうた

・ まちかねる人の面影よ立てて

しほらし匂送る花のなさけ

【評釈】 まちかねている人の面影を偲ばせて
ゆかしい香りを送る花の情けが嬉しい。

・ 庭のませ内に露の玉うけて

しほらし匂立ちゆる花のきよらさ

【評釈】 庭のまがきの内に露の玉うけて
ゆかしい香りを放っている花が、この上なく美しい。

『漂音評釈 琉歌全集』

島袋盛敏・翁長俊郎著より

資料2

那覇の文化特性を探る枠組み

(1) 文化の発現形態

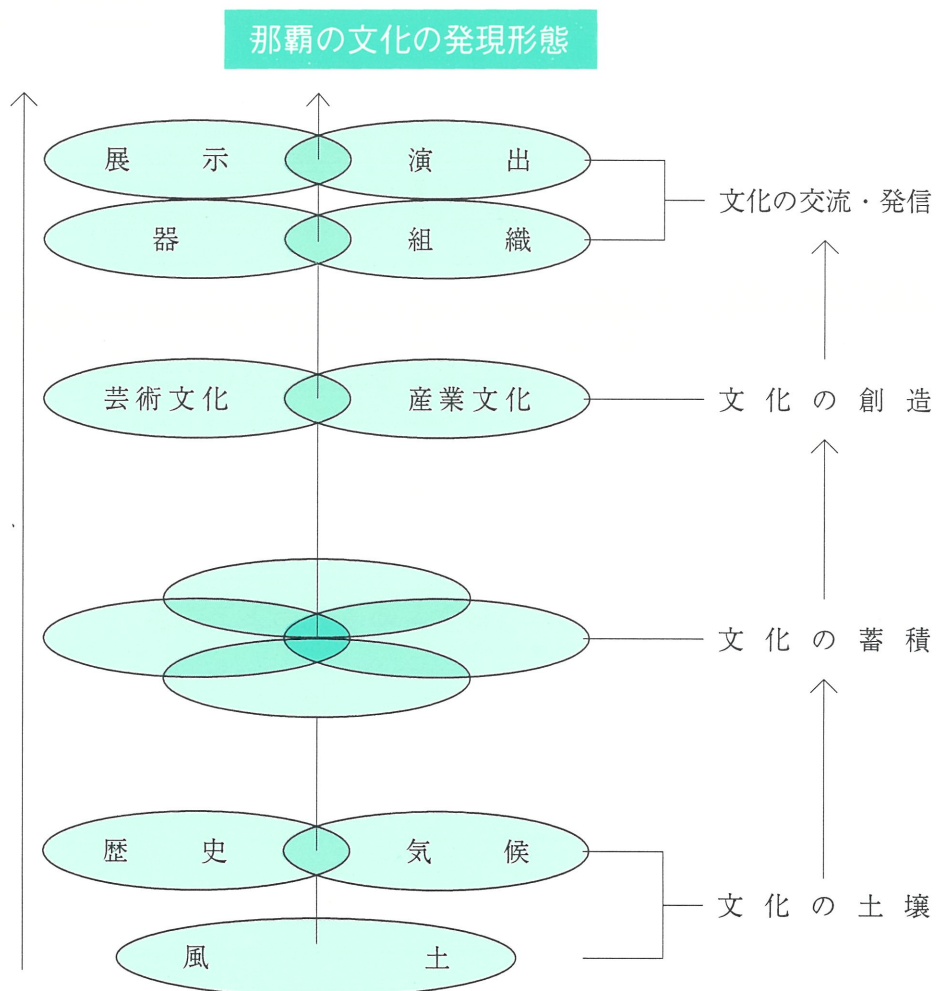
那覇の文化特性を構成するものは、その自然的条件と社会的条件である。

つまり、那覇の風土をベースとして、那覇が経験してきた固有の歴史と市民の気質が那覇らしい文化を生み出す源泉となっている。

この基礎条件を「文化の土壌」として設定する。

この文化の土壌の上に、市民が歴史的に熟成させてきた「文化の蓄積」がある。更にこれを基盤にして「文化の創造」があり、豊かに開花した「文化の発信・交流」がある。

勿論、文化創出のエネルギーは「芸術文化」だけでなく、「産業文化」によることも大きく、更に「器や組織」の機能や「展示の演出」という交流と発信の形態においてその文化特性は発現される。



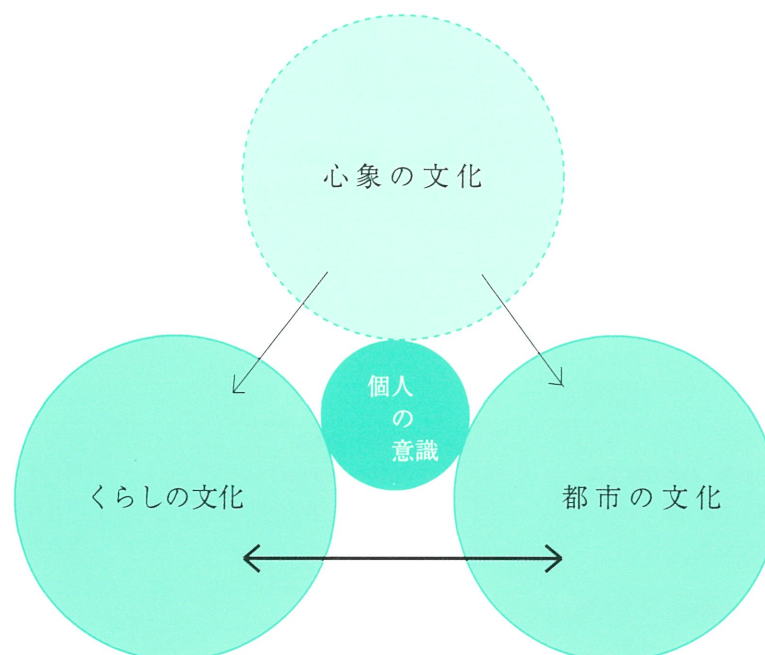
(2) 文化の実感

那覇の文化は、まず「市民個人のそれぞれの文化意識」が基本となる。この市民個人の文化意識によって創造された文化が社会的に共有され、実感されると、それは「那覇の文化」となる。

更に、それが日常生活のレベルで共有されると「くらしの文化」となり、その対極に那覇市が県都として、行政、経済、文化などの施策で積み上げることによって形成される「都市の文化」がある。

一方、必ずしも社会的に共有され実感されることはないが、やがて市民の意識の分野に立ち入っていく「心象の文化」もある。

那覇の文化を実感する関係



(3) 文化活動の諸元

市民がそれぞれの文化意識で芸術、文化を創造し、市が行政を通して文化施策を計画推進するためには、その発想の諸元として次の表に示される文化基層がキーワードとして考えられる。

那覇市文化活動の諸元キーワード

基 盤 条 件	風土	亜熱帯性・海洋性の自然・島しょ社会 浮島 ヒージャー ミーニシ ウリズン		
	歴史	王都首里 港町那覇 進貢 冊封 薩摩侵攻 廃藩地県 軽便鉄道 住民 10・10空襲 奇跡の1マイル 首里・真和志・小禄の合併 軍政府 日本復帰		
活 動	気質	サンヂュラサ（チムヂュラサ・シガタヂュラサ・アシビヂュラサ） イチャリバチョーデー シュリージュリー ナーハイバイ シナサキ 進取 テーゲー 沖縄病 ウチトンチュウ（シマナイチャー）		
	視	都心景観…代表的な建物・橋 ・モニュメント	まちなみ…スージグワー・界わい シーサー・石敢當	原風景…琉球八景 ガジュマルや福木の大樹・石垣 赤瓦
諸 元	聴	汽笛	民謡（三味線） 爆竹 方言	琉球の音律
	臭	公設市場界わい	サンニン 線香（トートーメー）	
動 作	蓄味	アメリカンフード 中華料理 琉球宮廷料理	沖縄そば 泡盛 チャンプルー ぜんざい 沖縄家庭料理	祭事料理
	積触	首里歴史公園 壺屋 国際通り 福州庭園	まつり・芸能 マチャグワー（市場） 文化財 公園	旧暦 イシゲー・朝市
元	芸術文化	芸能・音楽コンクール 展覧会 公演会 コンサート	文化祭 個展 琉舞 創作発表会 公民館活動	ウチナー芝居 歌劇 琉球古典音楽 御冠船踊 組踊 琉歌
	産業文化	展示会（物産展） ファッションショー	染（紅型）織（首里織・小禄クンジー） 漆芸 陶芸（壺屋焼） ガラス工芸	伝統技法 進貢貿易 琉装
元	展示・演出	アジア芸能祭 姉妹都市交流 経済交流 学術交流 首里城復元公開	市民芸能祭 清明祭 久茂地川フェスティバル ホームステイ 少年の船 大綱挽 ハーリー 首里文化祭	旧正月 祭事 NHKドラマ「琉球の風」 風水思想
	器・発信組織	県立芸大（美術館） 市民劇場（工芸館） 郷土劇場 博物館 県民ギャラリー 市民ギャラリー 新聞社 テレビ局 ラジオ局 出版社 港湾 空港 県都 文化協会	公民館 中小ホール カルチャー教室 サークル CATV 郷友会 門中	琉球王国・琉球政府 天使館 三十六姓
		都 市 の 文 化 ← → く ら し の 文 化 ← → 心 象 の 文 化		

市民のより人間らしい生き方を求める「心」の時代への対応

「調査報告書」より

	特 質	問 題 点	今 後 の 課 題
意識・人	・沖縄で最も活動する人達や活動する人の情報が集まるのが那覇市である。 ・市民グループ主催の文化活動がさかんである。 ・行政内部に行政の文化ニーズが高い状況がある。	・少なくともいいから文化振興の核となるような行動力のある人材がいなければならない。 ・まちづくりが文化化という認識がもっと強まってほしい。 ・市民レベルでの国際交流活動が全体的に育っていない。 ・市の文化振興のための取組みが市民にうまく伝わっていないなど、文化情報が市民にきちんと届いていない。	・文化振興のための施策や事業をもっと市民にアピールしていくべきである。 ・国際的な視野を育てる活動が求められる。 ・子ども達の健全育成には、見て触れて体験する文化学習が必要である。 ・市民運動の熟度を高めていくことが必要である。 ・文化情報の適切な収集と確実な提供サービスが望まれる。 ・行政職員は大きなプロジェクトに目がいきがちであるが小さくても面白いプロジェクトを上手につくっていくことで進める意識が大切だ。 ・行政職員の目をもっと地域に向き、地域の問題について敏感に勉強しなければいけない。
施設からみた活動	・ホール・ギャラリイ等活動発表の場は数多い。 ・交流イベント等への参加機会は多い	・世界の一流芸術を迎え入れるための質の高い施設機能が充分でない。 ・各種公共施設への専門的な職員配置が弱い。 ・コミュニティレベルで市民に自由に開放されるような活動拠点施設が少ない。 ・公共の文化関連センターの有効活用のため相互連携ネットワークや時間管理面の工夫がのぞまれる。 ・公益施設の使用のための届出→許可→活動報告などの一連の手続きの改善 ・文化のための施設も必要だが、市役所自身が文化ホールであるとか、まちかどがコンサート空間になるという視点が必要。	・どんな施設をつくるにも、どこにつくるといふ場所の選定が重要である。 ・県都にはハイグレード、ハイセンス、ハイクオリティの施設機能が求められている。 ・文化施設の有効利用のための管理システムの見直し、施設間ネットワークの形成、専門職員の適正配置などが必要である。 ・まちが文化活動の場であるという視点が行政にも市民にも必要である。 ・県と市の役割分担について検討する必要がある。
しくみからみた活動	・カルチャータワー講座やマスコミ等の主催するシンポジウム活動等が特に活発である。 ・県内各地の郷友会組織活動が定着している。 ・情報公開制度をスタートさせてきた。 ・暴力団追放等の市民運動を行政も一緒になって支えてきた。 ・企業等の文化振興活動（芸術鑑賞の催しなど）もさかんである。	・文化振興に関する向上的な意見を細かく拾いあげて、市政に反映させる機能が必要 ・市民が活用しやすい市民活動の情報化が図られていない。 ・文化活動団体や個人が相互に情報交流や事業協力を図っているための交流基盤がない。 ・市史編纂事業の蓄積が市民活動の振興に活用される必要性。 ・老若男女、世代を越えた文化交流活動の機会が少ない。 ・転入市民のもってきた地方の文化がうまく活かされていない。 ・行政内の連携、調整と推進力、そのための機関やシステムが十分でない。	・県都であり、那覇広域都市圏の核だという広域的な視点で取り組むことが大切である。 ・文化振興条例について、検討することも必要である。 ・全市民的な文化活動連絡協議会のような組織が必要である。 ・文化活動についての基礎データづくりと共にデータ更新のしくみづくりが必要である。 ・郷友会の力をもっと活かすべきである。 ・企業協力による文化振興をもっと拡げていくべきである。 ・市史編纂事業のストックの積極活用を図る。 ・文化の1%システムや文化・平和・生活都市づくりへのプラスαシステムなどの資金づくりの検討を加えるべきである。 ・文化に関する文化局と教育委員会の役割分担と、相互協力体制づくりが必要である。 ・行政全体を横につなげるビューロー的な総括機関が必要である。 ・文化基金活動を充実する必要がある。

那覇らしい文化の時代への対応

「調査報告書」より

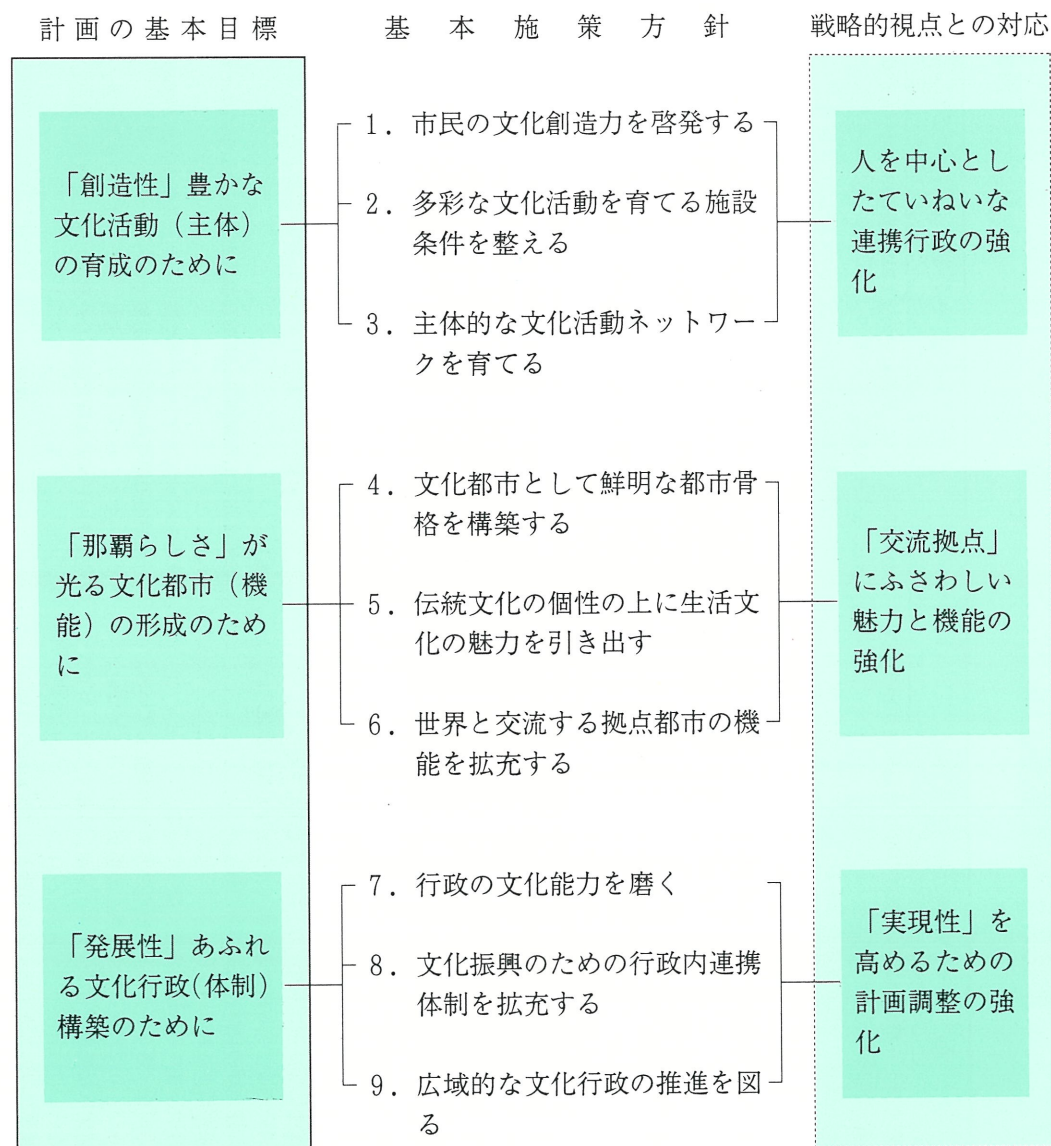
	特 質	問 題 点	今 後 の 課 題
歴 史 伝 統 文 化 の 蓄 積	・全国レベル・世界レベルで誇れる多様な沖縄文化がストックされている、首里城の復元と周辺整備が進んでいる。 ・文化財の掘りおこしとネットワーク化が図られている。 ・首里金城町、壺屋に伝統的なまちなみ景観がある。 ・那覇大綱挽、ハーリー、首里文化祭は、全市民的な伝統イベントとなっている。 ・旧字の中には今でも多くの伝統の祭祀儀礼が伝えられている。 ・沖縄各地から祭祀芸能が那覇に持ち込まれ各郷友会で演じられている。 ・方言文化が多彩である。 ・Uターン者には沖縄文化に興味を持っている人が多い。 ・沖縄の食文化の伝統が給食に活かされている。	・那覇市文化の蓄積に対する市民自身の認識・評価があまり高くない。 ・歴史の道すじの重要なものが現存していない（長虹堤等） ・那覇固有の文化財産（文化財・行事等）について、きちんととらえられるような整理ができていない。 ・すぐれた文化ストックが数多くあるにも関わらず、市民の財産として活かされていくことが少ない。 ・開発に伴って、貴重な埋蔵文化財が失われている。 ・伝統民俗行事が衰退しつつある。 ・全国的画一的な生活文化様式（衣・食・住・ことば等）が急速で定着してきている。	・市民に対して沖縄の文化の良さを見せる機会、知らせる努力を充実する必要がある。 ・こどもの頃から地域の伝統文化を見る目を育ていねいに育てることが大切である。 ・歴史的なまちなみの保存は、体系的な保存によって、都市の中での主張を持たせていくことが必要である。 ・一つひとつの文化ストックが持っている情報を掘り起こしその情報をだれもが使えるように整理し公開する。 ・沖縄の食文化の持つ長寿性をもっと評価しあう必要がある。 ・歴史的な環境の復元を強めていく必要がある。 ・歴史的環境の保全整備には、周辺環境を含めた整備が重要である。 ・案内表示のあり方について検討すべきである。 ・まつりは最も地域民俗文化を総合的・象徴的に表すものといえるので、まつりの再生に取り組むことが地域文化の活性化につながる。
新 し い 文 化 の 創 造	・マスコミ等のバックアップによる定例のコンクールが舞台、芸術、音楽、美術工芸、文学等の創作活動の刺激となっている。 ・多くのギャラリーが、新しい創造文化の発信の役割を果たしている。 ・創作演劇、創作オペラなど舞台芸術が活発化している。 ・別に本業を持ちながら、芸術・創作活動にたずさわる人が多い。	・創造的な文化活動を支援する仕組みが弱い。 ・若者の若者らしい発想や行動力が文化面に発揮される状況があまりに少ない。 ・特に日常的な活動の支援策が必要 ・市民が新しい創造文化との出合いを実感できる機会が少ない。	・ユニークな文化施設（例えば、旧倉庫の活用）による創作活動支援の場が必要である。 ・人々がどんなものに興味を抱くかに敏感なまちをつくることから、文化の創造が育つのではない。 ・若者の多様な嗜好を大きく一つにくくるものとして「音楽」は重要だと考えられるので、もっと「音楽のあるまち那覇」のイメージをつくりだしていくべきである。 ・公共施設がもっと創作文化の発表の場や交流空間となるような修景と整備をはかっている。 ・文化の創造と発信の機能を持つ公・民の施設、企業を育てていくことが大切である。 ・マスコミ・研究・行政等の機関については、市外流出することのないような対策をこうじていくことが望まれている。

交 流 の 時 代 へ の 対 応

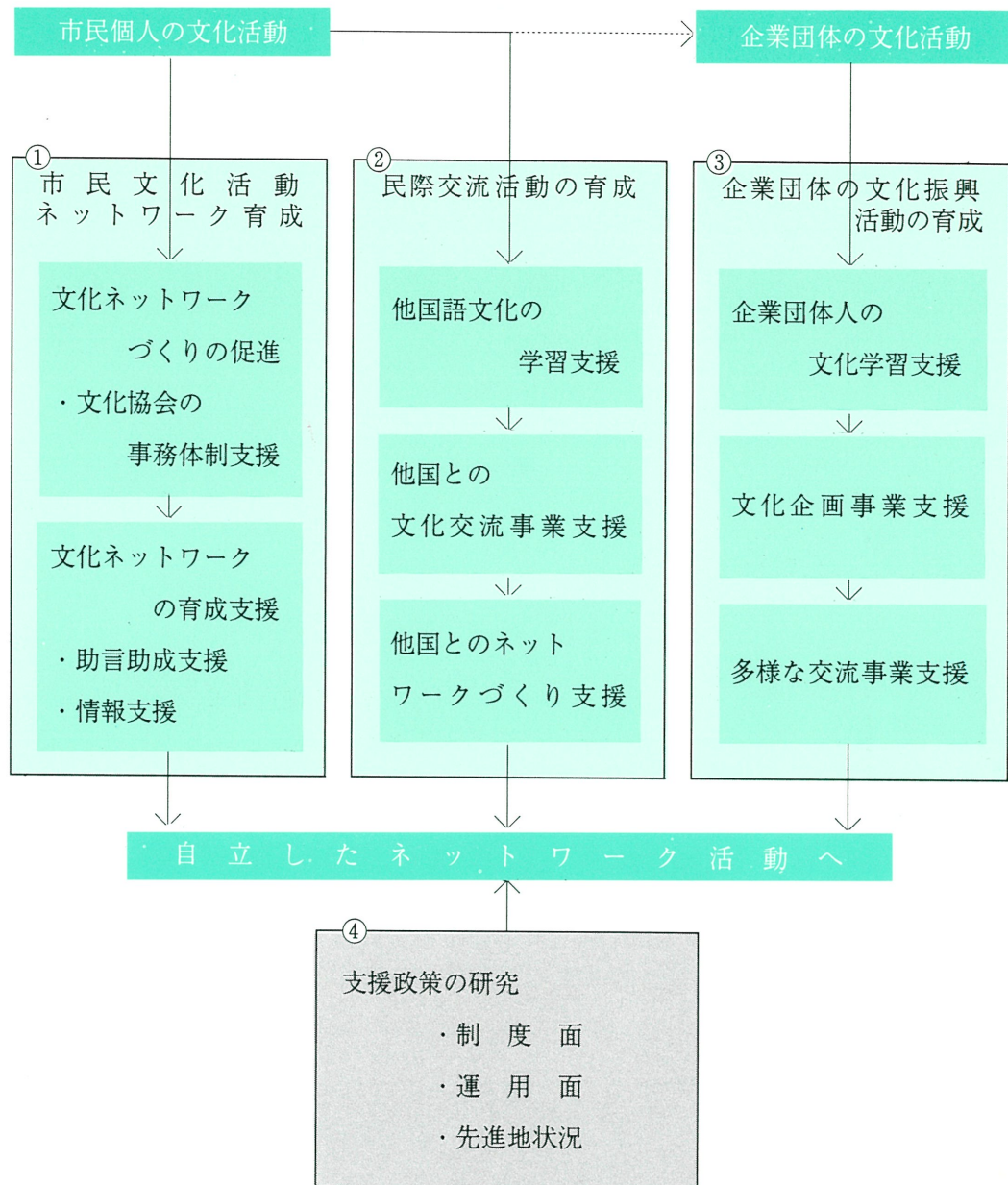
「調査報告書」より

	特 質	問 題 点	今 後 の 課 題
（県都・南の拠点性） 中 枢 拠 点 性	・県内外を結ぶ交通結節拠点である。 ・国際的なゲート機能をもつ（空港、港湾） ・行政の中核拠点である（県庁・国の出先機関） ・経済の中核機能をもつ（金融機関その他本社機能） ・情報の受・発信機能をもつ（マスコミ機関） ・高校、大学、専門学校、予備校、研究機関など、教育が多彩である。	・国際センター機能を持った拠点の市外立地傾向が強まっている。 ・ゲート機能の分散が進みつつある。 ・周辺市町村を含めた都市構造をとりえた上での施設計画を立案する必要がある。 ・企業が市外に転出していく状況がある。 ・ゲートシティとして提供すべき、県内文化や観光等の情報収集・発信機能がない。 ・大学が流出している。	・将来においても、那覇にいくと沢山の情報や文化や人が集まっているという状況をつくるべきである。 ・沖縄全島の核となる情報を支え続けてほしい。 ・非常に高密度化した都市なので、小さなプロジェクトを結びソフトなアレンジ等によって再編していくようなまちづくりが有効である。 ・例えば工芸センターでも、那覇に必要なものは情報収集・ネットワーク・発信の中核機能等のクリエイティブなプロデュース能力を持ったものである。 ・県内の各地方から流れてくる特産物が那覇のどのあたりに集まっているかが情報化してみえるようにする。 ・沖縄の文化の担っている全国レベルの価値を生かしていくための発信を強めていく必要がある。
（アイデンティティ） 都 市 の 魅 力	・市民生活がもし出す生活文化の活力が魅力である。 ・国際的な人、もの、情報が交流する都市である。 ・沖縄第1の歴史文化都市である。 ・王都首里と港町那覇は相互に行き交う人の交流で賑わうまちだった。 ・ホテル、飲食、ショッピング、アミューズメントなどサービス機能が集中している。 ・市街地やウォーターフロントの更新による都市環境の改善が図られている。 ・魅力ある新市街地の形成が進行中である。	・様々な文化が交流する街であることがうまく表現されていない。 ・交通渋滞が改善されない。 ・マチグワーがさびれつつある。 ・文化の流れ全体が、未だに東京に向いている時代である。 ・交流施設（空間）が整っていない。 ・渡湖から軍港にかけての川沿い空間がうまく活用されていない。 ・全国的にもワースト河川の上に並ぶ河川をもつ。 ・街のいたるところに大きな木（ガジュマル等）がほしい。 ・斜面緑地等の自然の減少傾向が激しい。 ・湧泉が活かされていない。 ・個性的なまちの表情が希薄になっている。 ・魅力的な大きなイベントが他市の方でも活発化している。 ・まちづくりに那覇らしさを残す姿勢があまりうまくない。 ・海に開けた都市としてのイメージが、うまくアピールできていない。 ・丘陵部の緑のスカイラインが景観として失われつつある。 ・道が歩く人間にとっての快適な連続性を欠いている。 ・国際都市として、外国からの観光客に対しての配慮を欠いている。	・緑のグランデザインが必要である。 ・都市のデザインに工芸産業を活かしていくべきである。 ・交通体系の見直し整備をおこなっていく必要がある。 ・人が集まり流れをつくるような道づくりが必要である。 ・都市の中のにぎびりした空間をつくりだすことが大切である。 ・水の都市のイメージをつくることができる。 ・那覇港が持っている「浮島」の歴史的イメージを再生すべきである。 ・県都としての役割として、歴史ストックを育んでいくまちなみづくりが重要である。 ・福州公園整備にしても、点的な整備に止まらず福州のまちをつくる発想が大切である。 ・沖縄文化にある東南アジア的な要素を引き出してアピールしていくことも大切である。 ・車をシャットアウトした道空間のバザールの活用が求められる。 ・丘陵斜面の開発誘導指針が必要である。 ・美しいまち、わかりやすいまち、楽しいまちを演出する。 ・産業サービスが高度に集積した都市の魅力を強烈に演出していくべきである。

文化行政施策体系



主要文化施策展開のしくみ



- ・「那覇市文化振興ビジョン」策定経過

那覇市文化振興ビジョン策定の経過

年 月 日	経 過
平成 4 年 3 月	「那覇市文化振興基本計画委託調査」報告及び「那覇市文化行政懇話会」からの提言
平成 6 年 6 月10日	・「那覇市文化行政審議会規則」の改正
平成 6 年 8 月22日	・「那覇市文化行政審議会」へ「那覇市文化振興ビジョン」の策定について諮問 ・第1回審議会の開催（策定基本方針及び委託調査報告の検討及び審議）
平成 6 年 12月 2 日	・文化振興ビジョン策定に伴う関係各課（11課）調整
平成 7 年 1 月20日	・第2回審議会の開催（ビジョン総論、各論部分の検討）
平成 7 年 2 月17日	・第3回審議会の開催（ビジョン総論、各論の最終検討）
平成 7 年 2 月～3 月	・審議会長との最終調整、答申確定
平成 7 年 3 月27日	・審議会より市長へ「那覇市文化振興ビジョン」を答申
平成 7 年 5 月27日	・部長会議において、「那覇市文化振興ビジョン」（文化局案）の審議
平成 7 年 6 月27日	・部長会議審議終了
平成 7 年 6 月30日	・「那覇市文化振興ビジョン」策定



- 那霸市文化行政審議會規則
- 那霸市文化行政審議會委員名簿

○那覇市文化行政審議会規則

(平成3年12月26日)
(規則 第48号)

改正 平成6年6月10日 規則第18号

(趣旨)

第1条 この規則は、那覇市付属期間の設置に関する条例（昭和52年那覇市条例第2号）

第3条の規定に基づき、那覇市文化行政審議会（以下「審議会」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。

(担当事務)

第2条 審議会は、市長の諮問に応じて、文化行政の推進に関する必要な事項について調査、審議する。

(組織)

第3条 審議会は、委員16人以内で組織する。

2 委員は、次に掲げる者のうちから市長が委嘱又は任命する。

- (1) 学職経験者
- (2) 関係行政機関の職員
- (3) 市議会議員
- (4) 市職員

(任期)

第4条 委員の任期は、2年とする。ただし、補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 委員は、再任されることができる。

(会長及び副会長)

第5条 審議会に会長及び副会長を置き、委員の互選でこれを定める。

- 2 会長は、審議会を代表し、会務を総理する。
- 3 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、又は会長が欠けたときは、その職務を代理する。

(会議)

第6条 審議会の会議は、会長が招集する。

- 2 審議会は、委員の半数以上が出席しなければ会議を開くことができない。
- 3 審議会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところ

ろによる。

(関係者の出席)

第7条 審議会において必要があると認めるときは、関係者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

(委任)

第8条 この規則に定めるもののほか、審議会の運営に関し必要な事項は、会長が審議会に諮って定める。

付 則

この規則は、公布の日から施行する。

付 則（平成6年6月10日規則第18号）

この規則は、公布の日から施行する。

○那覇市文化行政審議会委員名簿

(平成7年3月27日現在)

職 名	氏 名	所 属 等
会 長	真栄城 守 定	琉 球 大 学
副 会 長	金 城 幸 明	文 化 局 長
委 員	平 良 研 一	沖 縄 大 学
〃	大 城 立 裕	作 家
〃	名渡山 愛 擴	画 家
〃	池宮城 友 子	画 家
〃	照 屋 京 子	劇 団 代 表
〃	我那覇 清	沖 縄 タイム ス 社
〃	友 利 隆 博	琉 球 新 報 社
〃	高 里 良 樹	市 議 会 議 員
〃	前 田 政 明	市 議 会 議 員
〃	玉 城 宏 道	総 務 部 長
〃	真栄里 泰 山	企 画 部 長
〃	平 川 清 志	市 民 部 長
〃	高 嶺 晃	都 市 計 画 部 長
〃	鳩 間 用 吉	教育委員会指導部長

・ 那覇市の文化施設

・ 多彩な文化事業

多彩な文化事業



ミュージカル大航海・1991年



那覇市民会館



あけもとろ那覇総合文化祭



日展沖縄展



パレット市民劇場



さらば福州琉球館・1995年



学童たちの疎開展・1995年



那覇市民ギャラリー



街と彫刻展

那覇市文化振興ビジョン

きよらさの都市に しほらしやの文化

1995年6月策定

発行 沖縄県那覇市

〒900 那覇市泉崎1丁目1番1号

☎ (098) 867-0111(代)

編集 那覇市企画部文化局文化振興室

印刷 (株) 尚生堂 ☎ 869-0568

